



目からうろこの「自立」と「依存」の関係のお話

みなさんは「自立」と「依存」とは全く反対の意味であると思いませんか？その考え方に真っ向から異を唱える方を紹介します。その方は熊谷晋一郎（くまがやしんいちろう）さんと言います。簡単にプロフィールを紹介します。1977年、山口県生まれ。小児科医。新生児仮死の後遺症で脳性まひに、以後車いす生活となる。小中高と普通学校で統合教育を経験。大学在学中は全国障害学生支援センターのスタッフとして、他の障害者とともに高等教育支援活動をおこなう。東京大学医学部卒業後、病院勤務等を経て、現在は東京大学先端科学技術研究センター教授。その熊谷教授が以前受けたインタビュー記事から一部引用します。

脳性まひとはどういう障害ですか？

出生時に呼吸が止まるなどのアクシデントが起きて、その後遺症で運動機能や姿勢を維持する脳機能に障害が生じた状態のことです。基本的に、症状がそれ以上進行することはありません。

一人暮らしを始めたいきさつは？

小学生の頃、ふと、「親が先に死んでしまったら、自分は生きていかれない」と気づきました。当時の私は、生活全般、食事をするのも学校に行くのも、何でも親の介助を受けていましたから。この不安は年齢を重ねるにしたがって大きくなっていきました。親なしで暮らせる“実験”を早めにしておかないとまずいと思っていました。

〔中略〕

一人暮らしを始めて、まず困ったのはトイレでした。最初はなにも手を加えていないトイレで、介助してくれる人もいなくて、失禁してしまいました。でも、こう体を動かしたらうまくいくんじゃないかとか、ここに手すりを付けたら使えるんじゃないかとか、試行錯誤していくのは楽しい実験でした。私も物に合わせて動きを変えるし、物も私に合わせて〔原文ママ〕形を変える。どちらかが一方的に譲歩するんじゃないかと、物と私が「互いに歩み寄る」。一人暮らしの体験は、生まれて初めて世界と直接交渉することができた、そんなわくわくする感じがしました。それまでは世界と私の間には、いつも親が挟まっていて、「向こう側がよく見えない、じれったい！」みたいな感じでしたからね。

“自立”とはどういうことでしょうか？

一般的に「自立」の反対語は「依存」だと勘違いされていますが、人間は物であったり人であったり、さまざま

なものに依存しないと生きていけないんですよ。

東日本大震災のとき、私は職場である5階の研究室から逃げ遅れてしまいました。なぜかというとなんて簡単で、エレベーターが止まってしまったからです。そのとき、逃げるということを可能にする“依存先”が、自分には少なかつたことを知りました。エレベーターが止まっても、他の人は階段やはしごで逃げられます。5階から逃げるという行為に対して三つも依存先があります。ところが私にはエレベーターしかなかった。

これが障害の本質だと思うんです。つまり、“障害者”というのは、「依存先が限られてしまっている人たち」のこと。健常者は何にも頼らずに自立していて、障害者はいろいろなものに頼らないと生きていけない人だと勘違いされている。けれども真実は逆で、健常者はさまざまなものに依存できていて、障害者は限られたものしか依存できていない。依存先を増やして、一つひとつへの依存度を浅くすると、何にも依存してないかのように錯覚できます。“健常者である”というのはまさにそういうことなのです。世の中のほとんどのものが健常者向けにデザインされていて、その便利さに依存していることを忘れてるわけです。

実は膨大なものに依存しているのに、「私は何にも依存していない」と感じられる状態こそが、“自立”といわれる状態なのだろうと思います。だから、自立を目指すなら、むしろ依存先を増やさないといけない。障害者の多くは親か施設しか頼るものがなく、依存先が集中している状態です。だから、障害者の自立生活運動は「依存先を親や施設以外に広げる運動」だと言い換えることができると思います。今にして思えば、私の一人暮らし体験は、親からの自立ではなくて、親以外に依存先を開拓するためでした。

TOKYO人権 第56号 (2012年11月27日発行)

インタビュー／鎌田 晋明 (東京都人権啓発センター)

編集／脇田 真也

高校総体もほぼ終わり、3年生は自身の進路実現に向け本格的に動き出します。3年生に限らず熊谷先生が仰るように、進路上の悩みだけでなく、あらゆる悩み事や心配事を1人で抱え込むこと無く、勇気を持って周りの多くの人々に「依存しながら高校生活を過ごしてみても如何でしょうか。考え方や見方を変えるだけで、今より少し楽に過ごすことが出来るようになりますよ。

「知る・わかる」から「できる・使える」へ

$$t' = \frac{t}{\sqrt{1 - (v/c)^2}}$$

皆さんは上の式を見て心が震えますか？

これは、私が大学4年生のゼミで初めて出会った数式です。私は数学科の出身ですが、ゼミで読んだのは物理の本。その中にこの式が登場しました。

初めて見たときは、ただの記号の羅列にしか見えませんでした。しかし、時間をかけてこの式が持つ「意味」が見え始めたとき、私の心は激しく揺さぶられました。この式に表された理論、それを唱えたアインシュタイン、そして巻き起こる「双子のパラドックス」の論争…。その一つ一つが私の心に衝撃と夢を与えてくれたのです。たった3つの文字でできたこの方程式が、宇宙の真理を語っていました。

いったいこの式は何を示しているのでしょうか。高校1年生の皆さんにとって、今はまだ「 t 」も「 v 」も「 c 」も何も響かない文字かもしれません。しかし、これから物理を学べば、これら3つの記号が「時間」、「速さ」、「光の速さ」を表す記号だということがわかってきます。でも、これだけではまだ感動はありませんね。

さて、この「わかる」ということを考えてみましょう。

高校生活がスタートして約3ヶ月。毎日の授業を通して見せる皆さんの姿は意欲が高く、教室からは「わかった！」という声が毎時間のように聞こえてきます。しかし、高校初の定期考査を終えた今、「授業ではわかったはずなのに、テストではできなかった」という結果に悩んでいる人が多いように感じます。

「中学の時と同じように勉強したのに思うように点数が伸びなかった」「覚える量が多すぎて追いつかない」

あるいは「そこそこ点数は取れたけれど、本当に理解できているか不安」… そんな風に感じていませんか？

8月17日からは、前期後半が始まり、やがて前期の総まとめの時期を迎えます。だからこそ、この夏休みの過ごし方が非常に重要になります。この節目のタイミングで、これからの皆さんの勉強をガラリと変えるためのヒントを伝えます。

「知る・わかる」から「できる・使える」へ

あなたの勉強は、次の4つのステップのどこにありますか？これまでの自分を振り返ってみましょう。

ステップ①：知る（記憶の段階）

公式や英単語、歴史の用語を、スマホの画面を見るように頭に詰め込んでいる状態。

ステップ②：わかる（理解の段階）

「なぜその公式が成り立つのか」「なぜその歴史的イベントが起きたのか」を、自分の言葉で説明できる状態。

ステップ③：できる（応用・計算の段階）

理解した知識を使い、問題集の例題や応用問題でも、自分で解き方を組み立てて正解を出せる状態。

ステップ④：使える（統合の段階）

初めて見る問題や実生活の課題に出会ったとき、「あの時の考え方が使えそうだ」と気づき、複数の知識を組み合わせで解決できる状態。

中学までのテストや直前の詰め込み勉強なら、ステップ①の「知る」だけでも乗り切れたかもしれません。しかし高校では、問題が少しひねられた途端に手が止まってしまう。「知った」だけで満足せず、本質を「確認してわかる(②)」へ。さらに、応用し、自力で問題を「解いてできる(③)」へ。そして最終的には、バラバラの知識を「組み合わせで使える(④)」まで深めること。そこから本当の学びが始まります。

最初の式に戻りましょう。

この式はアインシュタインの特殊相対性理論における「時間の遅れ（時間膨張）」を表す方程式です。

t' を地球にいる友達の時間、 t を宇宙船に乗っているあなたの時間、 v をあなたの進む速さとします。

二人は同級生。あなたが光の速さに近いスピード v で進むとすると、分母のルートの中 $1 - (v/c)^2$ はどんどんゼロに近づいていきます。さて、宇宙船にいるあなたの時間 t が「1年」経ったとします。そのとき、地球であなたを待つ友達の時間 t' は、一体何年経っているのでしょうか…

本当の学びを始めて行きましょう。